

(要約版)

パプアニューギニアにおける檳榔文化 —トロブリアンド諸島のキリウィナ島を中心に—

西江雅之(文化人類学・言語学)
(アジア・アフリカ図書館館長)

1. 目的

本研究は、パプアニューギニアの本島の東側に位置するトロブリアンド諸島の中心地・キリウィナ島における「檳榔噛み (betel chewing)」について、その素材と道具、入手方法、摂取行為、社会的機能、それにまつわる社会観念などを、現地調査に基づいて記述することにある。

檳榔噛みは、世界人口の10～20パーセントが嗜むとも言われるように、嗜好品利用の代表的な例である。ただ、その主要素材が、熱帯地方のみに生育する植物の新鮮な実や葉であるために、檳榔文化を持つ地域は、基本的に、東南アジアを中心として、オセアニア西部からアフリカ東海岸に及ぶ熱帯地域に限られている。

キリウィナ島では、パプアニューギニアの中でも伝統的生活がよく保たれている地域であり、老若男女誰もが檳榔噛みを行う。伝統的儀式や現代の公的行事においても、檳榔子は重要な役割を果たしている。その一方で、近年、本島からの食料品や工業製品の輸入の増加に加え、観光客誘致に向けた“伝統の商品化”の動きも見られるようになっており、現金経済が急速に島民の生活を覆いつつある。本研究の主要な目的は、同島の檳榔噛みの伝統と共に、急激な社会変化のもとでの檳榔噛みの変容をも可能な限り射程に入れ、現地の人びとの視点や考え方を踏まえた記述を行うことである。

2. 方法

現地調査は、2011年7月23日～8月10日の日程でキリウィナ島の北部で実施した。北部は、トロブリアンド諸島全域を治める大酋長ダニエル・プラヤシ(Daniel Purayasi)が居住するオマラカナ(Omarakana)村が位置し、キリヴィラ(Kilivila)語の代表的方言が話されている地域である。

現地調査では、主に以下の項目に関して、聞き取り調査と映像記録作成を行った。①檳榔噛みの素材と道具(種類、形状、名称、評価など)、②檳榔子、キンマ、石灰の入手(栽培、収穫、保存等の状況など)、③檳榔子、キンマ、石灰の交換(島内市場での売買、物々交換、儀式での贈答など)、④檳榔噛みの状況(使用者の属性、使用に関する制約、道具の使用法、価値観)、⑤檳榔のその他の用途(儀礼や呪術、伝統化粧などへの使用)。

3. 結果

キリウィナ島における檳榔噛みでは、基本的には、最初に檳榔子(ブワ、buwa)の皮を歯で開けて中の核を取り出し、それを口に入れ、次にキンマの実(ムウェイヤ、mweiya)を齧り、さらに容器の中に入れた石灰(プワカ、pwaka)を匙(ケナ、kena)の先にまぶして口に入れ、それら三つの素材を口の中で混ぜ合わせながら噛む。老若男女、社会的な属性の如何に関わらず、島民のほぼ全員が、檳榔噛みを行う。キンマは、葉ではなくて、インゲンのような形状の細長い実が使用されていることが特徴的である。

パプアニューギニアの本土のほとんどの地域では、檳榔子は“ブアイ (buai)”という共通単語で呼ばれるほか、各集団が独自の名称を持つ場合も少なくない。キリウィナ島のキリヴィラ語では“ブワ (buwa)”と総称される。現在、キリウィナ島で使用されているブワには、“ブワトラ (buwatola)”、“ウダウェダ (udaweda)”、“ラシ (lasi)”の3種類が見られる。これらは大きさや色、風味に違いがあり、そのうちのどれを選ぶかは個人の嗜好によるとされる。市場で取引されているのはブワトラのみである。なお、世界には檳榔子を加熱したり、塩漬けにしたり、クミン、ターメリック、ココナツオイルなどを混ぜる例が見られるが、キリウィナ島ではそのような香辛料混合の例は見られない。ブワは、“ウルマ (uluma)”と呼ばれる檳榔樹専門の栽培地があるほか、集落の周囲などにも植えられている。なお、ブワは、市場などで購入するほか、親族から分配してもらう場合もある。女性の場合は、恋人関係にある男性から分配してもらうこともある。

キンマの実は、キリヴィラ語では“ムウェイヤ (mweiya)”と呼ばれる。ムウェイヤには、“ムウェイヤ・ドガ (mweiya doga)”、“ムウェイヤ・クウェヌヤ (mweiya kwenuya)”、“ムウェイヤ・カイ (mweiya kai)”、“ムウェイヤ・シピク (mweiya sipik)”の4種類が確認できた。檳榔噛みに用いられる石灰は“プワカ (pwaka)”と呼ばれ、珊瑚を焼いて粉状にしたものである。石灰の製造場所に特定の制約はないが、市場で販売されるものはオカイボマ村の海岸で製造されており、製造者には特定の職業名などはない。昔は、大酋長が用いる石灰は、同じクランに属する高い地位にある人物が作って贈呈したとされる。プワカは、バナナの葉を加工し束ねて作った“ドバ (doba)”と呼ばれる現地通貨と交換されることもある。

檳榔噛みの道具には、まず、“ヤグマ (yaguma)”(石灰入れ。ヒョウタンを乾燥させ、外側に装飾を施したものが一般的)と“ケナ (kena)”(石灰用の匙。エボニー製や火喰い鳥の骨製のものが高い価値を持つ)がある。ケナの中でも、酋長のみが持つことを許される半月型の装飾をつけた特別なケナは、“ケナヤプ (kenayapu)”と呼ばれる。その他に、老人や歯が悪い者などが、ブワ、ムウェイヤ、プワカを混ぜ合わせる際の容器“カイピタ (kaipita)”と素材をすり潰すための棒“カイメリ (kaimeri)”が

ある。カイメリとカイピタにはエボニーが最良とされるが、キリウイナ特産のメクの木やその他の雑木が用いられる場合もある。檳榔噛みの道具を持ち運ぶための袋は“カウヤ (kauya)” と言い、男性用と女性用で形態が異なる。

檳榔噛みは島民の仲間意識にも関係しており、ブワを噛まない者は、「この島の間人ではない」といった批判を仲間から受けることがある。こうした点からも、檳榔噛みは単なる個人的な習慣というだけではなくて、島民の社会関係を支える重要な機能を持つことが窺える。また、大酋長を頂点とする階層化された社会として知られるトロブリアンド諸島において、社会関係に基づいた婚資や葬式などの伝統行事、さらには現代的な公式行事においても、ブワは重要な贈り物の一つとして使用されている。

また、1世紀以上に及ぶ布教活動の結果、キリスト教は島民に強い影響力を及ぼしたが、その一方で、現在でも人びとの間には精霊や呪術に対する信仰が強く根付いている。実際に、現在でも、呪術を行う際の不可欠な道具として、ブワが用いられることがある。また、トロブリアンド諸島を代表する伝統行事“クラ (kula)” においても、ブワは呪術の要素であり、副次的交換物としても重要な位置を占めている。ただ、現在ではクラは変容・衰退しており、クラの実施時期や内容が不確定であるという問題があり、今回の短期調査では、参与観察の機会は得られなかった。

文化的多様性に富んだパプアニューギニア国において、現在、檳榔噛みは国全体で見られる一種の国民文化に発展してきている。同時に、その行為と素材利用、およびその習慣をめぐる観念や社会的機能には地域的な多様性が見られるが、急速な社会変化の一方でその記録は十分になされているとは言えない。パプアニューギニアの他地域における檳榔噛みの状況等に関する調査、および今回の調査成果との比較研究は、今後の課題としたい。